

「主体的、対話的で深い学び」の実現を目指して
〜生徒の聞く力に注目して〜

徳島県立鳴門高等学校

教諭

濱

紀子

教諭

宮城

久子

I 本校の概要

本校は全日制普通科高校で、一学年七クラス、二学年八クラス、三学年九クラスの、生徒数が九〇〇名を超える、県内でも最大規模の学校です。

生徒の進路は、進学が約八〇%、就職が約一三%で、四年制大学へ進学する生徒が多いです。部活動が盛んで、体育部では、硬式野球部の甲子園出場をはじめ、陸上競技部、体操部、柔道部等が毎年全国大会に出場し、文化部でも、放送部の全国大会出場や書道部の四国大会出場等活躍しており、活発な生徒が多い高校です。

II 研究動機

授業者としての悩み

授業者の感覚として、ここ数年、話を聞けない生徒が増え、集団への指示が通りにくく一斉授業がしづらくなったということがありました。そして、生徒はというと、授業

- 1 -

中、受身で板書を写すことに終始しがちでした。

また、授業以外の場面でも、集会等でおしゃべりがなくならず、生徒との会話をしても返事が短かったり、メモを渡せば覚えているが口頭で伝えたことは忘れやすかったりするという状況がありました。そこから、「聞く力」が乏しい生徒が多く、教員と生徒、また生徒同士のやりとりが希薄になっており、授業でも集団としての気づきや理解の深まりが乏しいという印象がありました。

そのような状況が続くと、三年生になってからの受験指導でも非常に困った状況が見られます。社会状況を知らず、必要な情報を集められない、問題意識を持ってニュースや新聞を目にしていけない、出題テーマについて興味が持てない生徒が多いことです。

また授業がしづらいクラスの特徴として、おしゃべりしていたり集中していなかったりして、教員の指示が聞き取れていないということが挙げられます。だから、学習活動が思うように進まず、成績が伸びないという悪循環に陥っていました。

スマートフォン等の視覚から入る情報に頼りがちな実態から考えても、あえて国語の授業で聞く場面を設定して、力をつけていくことが必要になっています。聞く作業は能動的でないと難しいため、生徒は根気がいりますが、あえて付加をかけることも必要ではないでしょうか。

- 2 -

「聞く」の学習目標の指摘

新学習指導要領「現代の国語」の中では、話すこと・聞くことに関して、「エ 論理の展開を予想しながら聞き、話の内容や構成、論理の展開、表現の仕方を評価するとともに、聞き取った情報を整理して自分の考えを広めたり深めたりすること」とあります。特に、現行の学習指導要領では、話し合いや論述などの「話すこと・聞くこと」「書くこと」の領域の学習が十分に行われていないことが課題として指摘され、新学習指導要領の中では、「現代の国語」で、「話すこと・聞くこと」で二十〜三十単位の授業をするように明記されています。(スライド①参照)

また、学習指導要領の改訂に先立ち、平成一六年二月の文化審議会答申「これからの時代に求められる国語力について」では、「聞く力」について、次のような指摘がなされています。「聞く力・話す力・読む力・書く力」の具体的な目標が掲げられ、「聞く力」として、「話の内容を正確に聞き取ることができる」「話し手が何を言いたいのかを探りながら」「言外の思いも感じ取るように」「聞くことができる」としています。そして、「場面に応じて最後まで聞くこと」として「話し手の意図を考えながら、講話や講演を聴くことができる」「確認すべき情報を整理して質問できる」ということが、「聞く力」として挙げられています。

ました。(スライド②③参照)

生徒の実態を知るために

そこで、生徒にどれくらい聞く力があるのか、生徒の実態を把握するために、アンケートをとることにしました。アンケート項目は二人で相談を重ね、独自に作成し、平成三十年六月に一年生二クラス(七六人)、二年生一クラス(三六人)で実施しました。

まず、国語の学習時間については、一年生の約七割、二年生の約六割が平日の学習時間が三〇分以下であり、宿題のある土日でもわずかしか増えないという状況でした。読書の習慣については、月一冊以上読む生徒は約三割、一年間一冊も読まないという生徒が四割を超えていました。また、八割以上の生徒が新聞を読む習慣がないこともわかり、改めて驚きました。

テレビを毎日見る生徒は約六割でしたが、点いているかから見るという生徒が多かったです。ラジオを聞く習慣については、一年生の約九割、二年生の約七割の生徒がラジオを聞く習慣がなく、集中して聞くという体験が極端に少ないことが分かりました。

その一方で、インターネットの活用状況を尋ねたところ、一年生で九七%、二年生で九四%の生徒が、毎日使ってい

るということでした。

このようなアンケート結果から、生徒の情報入手先が劇的に変化していることがわかりました。本や新聞から情報を得ているという生徒が激減し、テレビすら見ない生徒も多く、ラジオを知らない生徒もいました。生徒はパソコンやスマートフォン等で短い動画や画像を見ることが多く、視覚的情報に偏りがちな実態が明らかになりました。

また、アンケートの中で、生徒自身が自分の「聞く力」についてどれくらい把握しているかも尋ねてみました。(スライド④⑤参照)

「講演など大人数に向けて話されていても内容がつかめる」と答えた生徒は一六%、授業等で話されたことは内容がつかめると答えた生徒は三三%、四〜五人の少人数に対して話されたことは内容がつかめる」と答えたのは、三四%「自分一人に対して話されたことは内容がつかめる」と答えた生徒は一六%でした。

このように、自分の聞く力については、約半数の生徒が、少人数や個別に話されたことは聞き取れるが、大人数になると難しいと感じていることがわかりました。二年生でも同様でした。

- 5 -

III 研究

研究の仮説

そこで、生徒の生活の中で不足している「聞く」体験を増やすことにし、その効果についても考えました。まず、学習面の効果としては、さまざまな「聞く」体験を増やすことで、「聞く力」もつき、言語能力（読解力や表現力）も身につくのではないかと、また、「聞く力」がついてこそ、相手のニーズに応えて「話す力」もつき、コミュニケーション力も伸びて、社会人として必要な力も身につくのではないかと考えました。

そして、心理面での効果としては、学校の中でも増えてきている、相手の意図がわからず、また自分の気持ちを上手く言葉にできないキレやすい生徒にも、効果があるのではないかと考えました。最近の生徒は視覚情報に頼りがちです。しかし、聞く力がある生徒は慎重で成績も良好です。そこで、聞くことを鍛える活動をしたらどうかということ、研究に取り組んでいきました。

研究に取り組むにあたって模索したこと

まず、聞く教材を探すことに苦労しました。絵本の読み聞かせやラジオはどうか、新聞の切り抜きをして教材を探

- 6 -

してはどうかということ、さまざまなどころから教材探しを行いました。新聞の切り抜きを使った教材として注目したのが、「海洋プラスチック問題」や「環境問題」の記事で、生徒同士の話し合いの中で、意見交換がしやすいものを選びました。先行研究や実践例も探してみましたが、小学校や中学校対象のものはあっても高校を対象とした研究は少なく、市販の教材もありませんでした。今回は、「聞く力」についての評価テスト（市販）を活用したのですが、高校を対象としたものはなかったので、中学生を対象としたものを活用しました。

研究の対象としたクラス

○平成三〇年度

一年生二クラス 二年生一クラス

○令和元年度

一年生二クラス 二年生一クラス 三年生二クラス

実践1

取組1 CDを使った「聞く力」を伸ばす学習活動

○実施クラス

平成三〇年度 一年生二クラス 二年生一クラス

(各三回実施)

- 7 -

令和元年度 一年生二クラス 二年生一クラス

(一学期一回実施)

○使用教材

- ・「中学校国語科 聞く力の評価と指導」高橋俊三
- ・新聞記事を使ったオリジナル教材

◇「中学校国語科 聞く力の評価を指導」

- ・内容…「聞く力」を高めるために、朝のホームルーム活動や、家庭での留守番電話等の場面を設定し、正しく聞き取れているかを問うたり、聞き取った内容についての意見や感想を書いたりするもので、CDがっています。

- 8 -

結果

定期テストでは成績上位でも、正確に聞き取れていない生徒もいました。例えば、学級での連絡の場面では、開催時間や提出物の案内等、複数の伝達事項の中から自分に必要な情報を聞き分けられない生徒がいました。(八%)

また、留守番電話を聞き取るテストでは、必要事項だけでなく、相手を気遣うことば等も混ざっているためか、必要な情報を正確に聞き取ることが難しかったようです。部活動の練習試合についての連絡だったのですが、集合時間と試合開始時間、集合場所と試合の場所等、「時間」「場所」が複数出てくると、聞き分けられず、特に約三割の生徒が「場所」を間違えていました。

◇「新聞記事を使ったオリジナル教材による聞き取り」

・内容…海洋プラスチック(マイクログラスチック)に関する新聞記事の朗読を聞き、ワークシートの質問に答える。(資料1〜4)

・授業の方法…実施時間(二五〜三〇分)

・授業の進め方

- ① ワークシートを読む
- ② 新聞記事の朗読(タブレットに録音)を聞く。

③ 質問に従って、聞き取った内容を答える。

④ 答え合わせをする。(スライド⑥参照)

結果

「どこで」「だれが」等の5W1Hに関する情報を、単語でならば、正確に聞き取れていた(正答率八六%)のですが、記事の内容と合致するようなものを選ぶ問題では、間違えた生徒も多かったです(正答率七七%)。

また、メモ欄を上手に活用できる生徒が少なく、メモ欄が空欄の生徒は約四割いました。資料3・4に挙げたワークシートのように、上手くメモが取れていた生徒はわずかでした。これらの生徒はワークシートを読んだ段階で、聞きとるべき項目を先にメモしておき、それから朗読を聞いていました。そして、自分の感想を書く質問に対しては、短い言葉での感想が多く、内容に踏み込んだものや、自分の今後の生活改善につなげるというような深い意見まで書けた生徒は少数でした。

今後の学習の予定

今後も、この「聞き取る」という学習は続けていきたいと考えていますが、学習集団や生徒の実態に応じて、教材の選択が必要です。例えば、一年生では、連絡事項や留守番電話などの情報を正確に聞き取る、基礎的な教材から始

め、二年生で新聞記事や短い評論文等の朗読を聞いて、自分の意見や感想を書く教材、三年生では、複数の新聞記事や評論文の朗読を聞き比べて、自分の感想や意見を書いたり、友達と話し合ったりして理解を深めていく教材という風に、段階的に「聞く力」をつけるようにしたいと考えています。

実践2

取組2 「ラジオCMを聞いてみよう」

ラジオCMに注目した理由は、ラジオという媒体が生徒の中で消失しつつあることが、アンケートの結果からも明らかであること、「聞く」という活動に特化できること、一分間のラジオCMなので、構成や効果音など、リスナーに聞かせることに工夫が凝らされていること等が挙げられます。また、約十年前にも教材として使用したことがあり、生徒の興味・関心を引きやすい内容となっていることなどです。

- 11 -

「聞く」ことに加えて、新聞等の資料を使うこと、探すこと、書くことと関連づけて行う。

第一時 新聞記事を探してみよう（図書室で実施）

人と自然との関係を表す記事を探す

第二時 ラジオCMを聞いてみよう1（学習1・2）

「エミユとコウイチの往復書簡」

（テーマ・環境問題）

第三・四時 ラジオCMを聞いてみよう2（学習3）

「聞くこと」から「書くこと」

「環境問題について自分の考えを書く」

第一時の様子

「人と自然との関わり」についての記事を探して切り抜く作業を行いました。四人グループで活動し、昨年六月の新聞（三社分）と「ニュートン」などの科学雑誌を使用しました。（スライド⑦参照）

第二時の様子

前時の新聞の切り抜きを導入に使用しました。生徒と新聞記事を分類しながらグループ分けし、それぞれに見出しをつけ、生徒が注目した記事の多くが、環境問題がテーマのものであることに注目させました。その後、「ラジオC

○実施クラス

令和元年度 三年生理系クラス（一学期四回実施）

○活動内容

- 12 -

M」を聞き、内容を思い出しながら、ワークシートの空欄を埋めていきます。また、流したラジオCMのシナリオは資料のようになります。(資料5参照)

このラジオCMを聞き取り、ワークシートの空欄部分に自分が書き込んだ内容を発表していきます。その後、環境問題について、教員の解説を聞いた後、CMのシナリオをペアで読み合い、お互いの音読を聞き合います。普段から音読を取り入れていますので、比較的スムーズでした。

次に「作品分析シート」(資料6)に取り組みました。生徒の様子は次の通りです。(スライド⑧⑨参照)

第3・4時の様子

ラジオCMを聞いてみよう2(聞くことから書くことへ)まず、環境問題についてのカードを使った補足説明を聞き、「学習2分析シート」について振り返りを行いました。そして、「学習3 書いてみよう」の資料7と8をもとに、環境問題について自分の考えを書いていきました。詳しくはワークシート(資料9・10)をご覧ください。

◇生徒の感想(「学習2作品分析シート」より抜粋)

- ・続きが気になってしまい聞き入ってしまった。
- ・「ギヤー」という効果音で聞く人に印象づけていると

- 13 -

思った。

- ・後半はスピード感があった。
- ・伝えたいことを少しでも多くの人に聞いてもらえるような工夫がある。
- ・ストーリー性があり、物語に入り込みやすい。
- ・ラジオだからできることだと思った。ラジオだと風景や二人の変化を想像することができる。
- ・ラジオはテレビのような視覚の主張がないのに物語に入り込めた感じがした。

◇授業者の感想

生徒にとっては「ラジオCMを聞くこと」自体が新鮮だったようです。慣れてくると次第に内容に引き込まれていくのがわかりました。また、「環境問題」や「地球温暖化」についての生徒の基礎知識が乏しく、補足説明が必要でした。カードを使って板書にまとめることで理解を深めることができたと思います。生徒の意見をプリントにして配布することで、友達の意見を知って自分の考えの助けにすることができました。

考察

生徒は、学習1ではラジオCMに引き込まれるように真

- 14 -

剣に聞けていました。聞く活動の時は一見、教室内はとも静かですが、生徒の頭の中は忙しく動いているという状況です。一度で聞き取れる生徒は少なかったのですが、二・三回流すと正確に聞き取れ、ワークシートに記入できるようになりました。また、書いている意見の内容には個人差が見られました。中には、CMのユーモアや皮肉を指摘して、詳しくまとめる事ができる生徒もいました。(資料9・10)

今後の学習予定

学習3「書いてみよう」で書いた意見文を取り上げ、まとめをする予定です。また、二学期から本校にも電子黒板が導入されますので、「地球温暖化」についての動画(二一〇〇年の天気予報)を見せ、さらに理解を深めさせたいと考えています。

- 15 -

「聞く」活動から他の活動への広がり 1

この実践1・2が「聞くこと」に特化した取り組みだったのですが、その活動から他の活動に広がったものがあります。

ます。二つほどご紹介します。

一つは、一年生の「国語総合」での、話し合い活動(班活動)です。実施クラスは一年生一クラス、活動内容は、二つの評論文を比較してそれぞれの主張を整理するというものでした。教材は「イースター島にはなぜ森がないのか」(第一学習社)という評論文を使用し、中学校の時に学習した「モアイは語る 地球の未来」(東京書籍)との読み比べを通して、筆者の主張を明確にしていけます。

班活動の様子(話し合い活動)

- ① 二つの文章のキーワードを書き出す。
- ② マナボード(ホワイトボード)を活用し、二つの文章のキーワードを「共通点」「相違点」別に、付箋で整理しながら貼っていく。
- ③ 整理した内容から、本教材の筆者が主張したかったことは何かを話し合う。
- ④ 班ごとに発表する。

この活動では、二つの評論文の比較をさせたいと教材探しから始まったのですが、生徒にとっては、比較する文章が中学校で学んだ教材であったため読みやすかったようです。ただ、反省点としては、比較する際に、それぞれの評

- 16 -

論文のキーワードを挙げさせてのですが、それが多すぎて、最初に数の制限をすべきだったとことが挙げられます。ただ、生徒は話し合いの中で、お互いの意見をしっかりと聞き合っていました。(スライド⑪⑫参照)

結果

生徒達が積極的に生き生きと活動していた姿が印象的でした。二つの文章のそれぞれのキーワードを見つめるために、非常に丹念に読んでおり、付箋を貼りながら班で話し合う場面でも、活発に意見を出し合っていました。また、生徒のホワイトボードと、板書の形式をそろえたことで、生徒達にとっても班での話し合いを整理しやすかったようです。参観した教員からは、授業者の説明を聞くときに、しっかりと顔を上げて集中して聞いている生徒が多く、印象に残ったとの感想がありました。

- 17 -

「聞く」活動から他の活動への広がり 2

次に、「国語研究」での活動です。これは文系の選択科目で国語(現代文・古文・漢文)の問題演習等を行う授業です。実施したのは、二年生二三人のクラスです。活動内容は、自分の好きな歌を選び、PRポスターを作成し、そ

の曲の動画を流しながら、歌詞についてプレゼンテーションを行い、最後に、友達の発表や自分の発表について評価し合うというものです。

生徒の様子

ここに挙げたのが、生徒が作成したポスターの一部です。

自分の好きなアーティストについて、コメントやレイアウト、色使いを工夫しながら書いていくのがよくわかります。また、自分がその曲を勧める理由についても、「前向きな気持ちになれる」等と、自分の言葉で紹介していたのが印象的でした。

この活動は生徒達にとっても楽しかったようです。(スライド⑭⑮参照)

結果

自分が好きな歌詞を紹介するということで、普段の授業よりも意欲的に取り組む姿が見られ、興味関心の高さが窺えました。また、他の生徒のポスターを参考にしながら自分のポスターを仕上げ、声の大きさやスピードに気をつけ、相互に刺激し合い、他者を意識しながら発表することができました。そこから、「考える」↓「調べ・まとめる」↓

- 18 -

「話す」↓「聞く」↓「感じる」↓「考えを深める」と思索の深まりが感じられました。

IV 全体の考察

次に、事後アンケートの結果です。(スライド⑩)

アンケートからは、聞く活動を積極的に取り入れることで約九割の生徒が、「聞く活動が役に立った」と答えており、意識付けをして取り組んだことで、生徒自身も意欲的に取り組み、かつ効果を実感できたことがわかりました。もちろん、生徒は、視覚かたの情報に頼りがちな生活をしていることは変わりませんが、国語の授業の中だけでも、聴覚を刺激して、「聞く」体験を増やすような言語活動を行うことで、「聞く力」の後退に歯止めをかけることが、少しはできたのではないかと思います。

研究を通してわかったこととしては、一斉授業の中ではわからなかった個人の力量に気づけたことです。ワークシートの記入内容や話し合いの様子から、個々の「聞く力」や「書く力」「理解力」が授業者として把握でき、個別の指導につなげることができました。

また、意欲的に取り組む生徒の姿が見られたことも大きな収穫でした。聞くことに集中することで、普段よりも教室が静かな空間となり、その後の学習活動もスムーズでし

た。この経験から、「聞く活動」は、授業の導入部分で取り入れるとより効果的だとも言えます。また、聞いたことを思い出したり、聞いたことから考えたり、思考を深める様子が、生徒の表情やワークシートの記入内容からも窺うことができました。

先に、取り上げた「これからの時代に求められる国語力について(文部科学省)」と照らし合わせてみると、今回の研究では、「自分の意見や考えを組み立てる」ことや、「確認すべき情報を整理して質問できる」ところまでは、なかなか到達できませんでした。やはり、単純な情報の聞き取りから初めて、「情報をつかむ」↓「自分の感想や意見を書く」↓「友達の感想や意見を聞き、自分の考えを深める」といったように、段階的に力をつけていくことができるような、学習の組み立ての工夫が必要だと思えます。

最後にイメージ図をご覧ください。(スライド⑪)

「主体的・対話的で深い学び」を実現していくためには、その土台となる「聞く力」「話す力」を鍛えていかなければ、その上に「読む力」「書く力」も、「主体的・対話的で深い学び」も育っていかないとします。しっかりと情報を掴むためにも、他人の意見を聞き、自分の考えを深めていくことが必要だと思えます。

参考文献

- 「高等学校学習指導要領（平成三〇年告示）」
「これからの時代②求められる国語力について」（文部科学省）
「中学校国語科 聞く力の評価と指導」（高橋俊三 明治図書）
「プレジデント」どんどん話が弾む「聞く力」入門」（二〇一八年六月号）